



1. 技術者の交流
2. 魅力ある職場に
3. C氏に重ねて

1. 11月9日に東京の鉄道建設公団の本社でちょっとした集りがあった。電源開発KKから新しく入社した40人ほどの土木技術者が、仕事につくに際してのことである。技術者不足の悩みは、3月に発足した鉄道建設公団についても同じことで、幹部はあれこれ対策をたてていたが、その一つとして電発幹部との話し合いもはじめた。電発にしても、それほど人が余っているのではないし、ほかに譲るとなれば、これまた手離したくない人達の中から選ばなくてはならないだろう。その辺の難問を解決して、40人の出向がきまったのである。公団では待遇とか、仕事の分担についてもかなり注意を払いつつ、今後の活躍を大いに期待しているという。構成員は39才の本社副課長を最年長として、比較的若い人達ばかりだそうだ。少ない技術者に存分に活躍してもらって、たくさん仕事を片付けてゆく。この問題を切抜けるのに技術者の流動ということがいわれている(本誌2月号 鈴木忠義氏)。

鉄道建設公団と電源開発KKの間で、大量の移動の話し合いが進められたということは、日本の今後の技術者不足問題を解決する一つの足がかりともみられ、また、専門技術を磨いていけば、つぎつぎに良い仕事にめぐり合えるという自信を技術者諸氏が抱いてよいという点でも注目に値しよう。 [C]

2. 「イギリス経済のもっとも重大な基本的な弱点は、高級技術者の不足と、大学や産業界における工学的研究の不十分なことである。……アメリカはわが国の6倍の優秀な技術者を、ソ連は年間わが国の13倍の技術者を養成している。……技術者は民族間の不断の競争でもっとも重要な役割りを演ずるものである。後期ローマ帝国のもっとも感動的な記念碑は、山を貫いたトンネルによって、市街へ水を供給した大事業であったと私は記憶している。……ロンドンのバスを1時間にもう2mile早くできたら、会社や個人の利益は別としても公共の輸送費だけで年間200万ポンド節約できる。それを可能にするのは運輸技術者だ。街頭で人命を救助してくれるのは、実は、道路技術者のはずだ。低開発国のために実際につくしてくれるのはダム技術者だ。……わたしがもっとも驚くことは、われわれがこの主題を魅力あるものになし得ない無能力さである」。イギリスの前科学相ホッケは、こうのべて、もっと若者たちに技術、特に建設技術の魅力と無限の現実的可能性を知らせるべきだと強く訴えている。[ホッケ著、松井巻之助訳、科学と政治、岩波書店、昭和39年9月刊] [S]

3. 「学生の中で科学方面を選ぶ人と、いわゆる文科系統を選ぶ人との数を見ますと、その間にアンバランスがある。これは日本のように高度に発達した工業国にしてみると、ちょっと不思議な気がする。これは、科学方面に進む人を何かの方法で——高給で奨励するとか、そういうことよりは、むしろ科学者としてのイメージというものを高めて、科学者が世の中にどれだけ貢献するかというふうなことを、もっと世間の人の認識を改める必要があるのじゃないか……。」「日本ではいつも学者というものは、とにかく精神的な尊敬を受けてはきているけれど、物質的な面においてはいつも閑却されてきている。しかし、日本人はあまり気づいてはいないようだけれど、よその国の科学者は、日本の科学者が非常に基礎的な、じみな研究をしとしてつとめていることに、深い尊敬を払っております。大学なり実験室なりで、非常に深い研究がおこなわれているということは、日本では認められなくても、世界のほかの国の科学者が知っています」……。座談会「日本人の自信とためらい」——在日外国人の観察と意見——(朝日ジャーナル300号)では恵まれた科学者の地位として以上の発言をのせている。ここでは、東洋の国日本の占める国際的な地位を第三者的な眼で分析し、明日の日本にも言及している。以上の二つの問題点はほかの国でも問題になっていることと聞くが、われわれを継ぐ若人が、優秀な人材が土木の分野に入ってくるよう、できるかぎりの方策はとってしかるべきものと考えよう。 [E]

マンズリートピックスの欄が四名の分担となりその姿を一新してから半年たった。今号をもって筆者が交代となるので、ここ半年の間担当してきた筆者をここで明らかにする。続いて新年号から新しい四人の担当となるので続いてご愛読承りたい。仕事の終わった四名の名前は、J・八十島義之助(会誌編集委員会委員長)、S・樋口芳朗(同副委員長)、C・高橋 裕(同委員)、E・河村忠男(土木学会事務局)である

[J・S・C・E]